

## 第1節 世界の人口と出生率の推移

### （世界の人口）

世界の人口は、20世紀後半以降、急激に増加してきた。国際連合の資料によると、1900（明治33）年には16.5億人、1950（昭和25）年には25.4億人であったが、1975（昭和50）年に40億人、1990（平成2）年に50億人、2000（平成12）年に60億人を超え、2007（平成19）年には66.7億人となっている。1900年と比較をすると、107年間に世界の人口は約4倍に増加したことになる。

国連の人口推計によると、今後も世界の人口は増加を続け、2025（平成37）年には80.1億人、2050（平成62）年には91.9億人と、現在よりも約25億人増加する見通しとなっている。ただし、人口増加率については、世界的に鈍化傾向となり、ヨーロッパは全体として人口減少に転じる。

2050年における世界の人口割合は、アジアが57.3%（60.4%）、アフリカが21.7%（14.5%）、ラテンアメリカが8.4%（8.6%）、ヨーロッパが7.2%（11.0%）と予想されており、また、人口が最も多い国は、インドが16.6億人（11.7億人）、次いで中国が14.1億人（13.3億人）、アメリカが4.0億人（3.1億人）、インドネシアが3.0億人（2.3億人）、パキスタンが2.9億人（1.6億人）の順となっている（括弧内は2007年の数値）。日本は、2007年で世界第10位（1.3億人）であるが、2050年は第16位（1.0億人）に後退すると予想されている。

### （世界の合計特殊出生率）

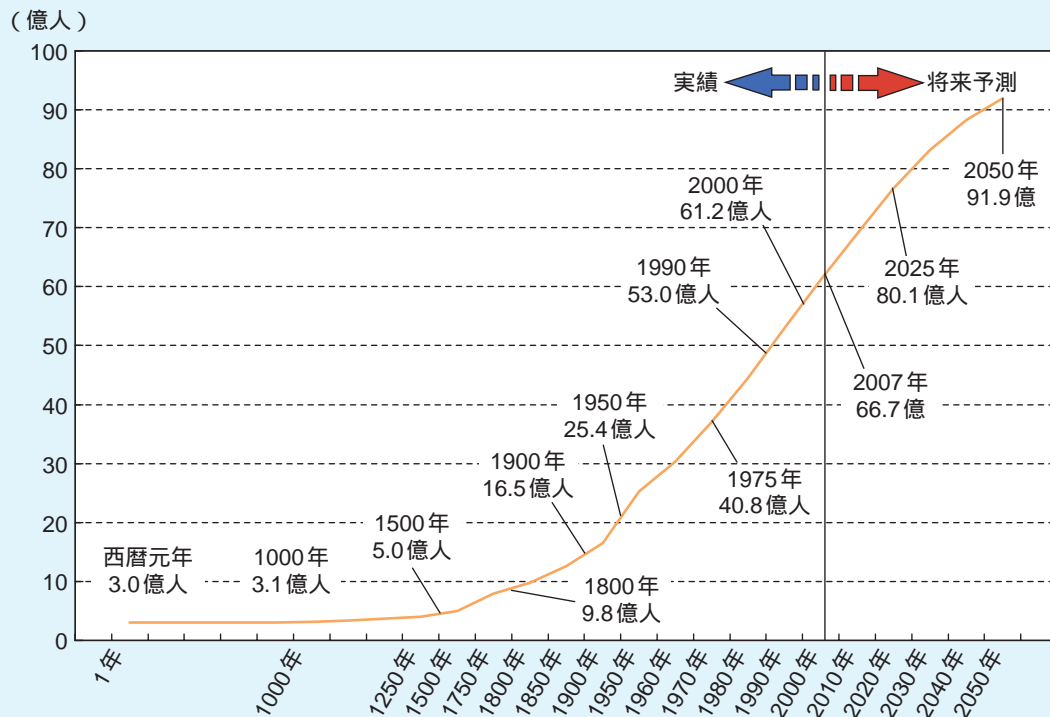
世界全体の合計特殊出生率の動きをみると、

1950～55（昭和25～30）年平均で5.02の水準にあったが、その後低下傾向となり、1975～80（昭和50～55）年平均で3.92と4を下回り、1995～2000（平成7～12）年平均では2.80と3を下回った。2005～2010（平成17～22）年平均では2.55であり、先進地域が1.60、発展途上地域が2.75となっている。国連の推計によると、今後も出生率は低下傾向が続き、2045～50（平成57～62）年平均では世界全体で2.02、先進地域では1.79、発展途上地域では2.05と予想されている。

世界の合計特殊出生率（2005～2010年平均）を地域別にみると、アフリカが4.67と、他地域を大きく引き離して最も高い。次いで、ラテンアメリカ（2.37）、アジア（2.34）、オセアニア（2.30）の順となっている。ヨーロッパは1.45と低く、北部アメリカは2.00となっている。

また、国・地域別にみると、最も高いのはニジェール（7.19）であり、次いで、ギニアビサウ（7.07）、アフガニスタン（7.07）、ブルンジ（6.80）、リベリア（6.77）の順となっている。一方、最も低いのはマカオ（0.91）であり、次いで、香港（0.97）、ベラルーシ（1.20）、韓国（1.21）、ウクライナ（1.22）、ポーランド（1.23）、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ（1.23）の順となっている。

## 第1 - 補 - 1図 世界の人口の動き



資料：1900年まではUnited Nations“ The World at Six Billion ”、1950年以降はUnited Nations“ World Population Prospects2006 Revision ”。

## 第2節 欧米諸国の少子化の動向

## 1 欧米諸国等の合計特殊出生率の水準

欧米諸国（オーストラリアを含む）の2005（平成17）年の合計特殊出生率の水準をみると、アイスランドとアメリカが2.05で最も高く、次いで、フランス、アイルランド（ただし、2004年の数値）、ノルウェー、オーストラリア、デンマーク、フィンランドが1.8から1.9台の水準で続いている。

次いで、1.7台の水準にある国は、北部ヨーロッパではスウェーデン、イギリス、西部ヨーロッパではルクセンブルク、オランダである。

一方、1.2から1.3台の低い水準にあるのは、南部ヨーロッパのギリシア、イタリア、スペイン、西部ヨーロッパのドイツであり、同じ年の我が国（1.26）をやや上回る水準となっている。

このように、我が国を含む欧米等の先進地域に属する国々では、合計特殊出生率は人口置換水準（2.1程度）を下回っている。